

2016（平成28）年11月22日

株式会社●●●●●●●● 御中

福岡県弁護士会

会長 原 田 直 子

福岡県弁護士会人権擁護委員会

委員長 黒 木 聖 士

## 要 望 書

当会は、弁護士法に規定された弁護士の使命である基本的人権の擁護と社会正義の実現を期するために人権擁護委員会を設け、人権救済申し立てを受けた案件について調査を行い、事案に応じて適宜の措置をとることとしております。

このたび、●●●●●●●●および●●●●●の申し立てにかかる案件について、人権擁護委員会で調査・検討を重ねた結果、貴社に対して下記のと通りの要望をするのが相当であるとの結論に達し、当会の議決機関である常議員会においてこれを承認しました。

本要望をすることとした理由は、別紙「要望の理由」のとおりです。

### 記

申立人●●は、2014年（平成26年）1月28日午前7時頃暴力行為等処罰に関する法律違反で逮捕されましたが、その事実につき、貴社は、2014（平成26）年1月29日、本件逮捕の事実を実名報道されております。

しかし、本件被疑事実は、軽微な事件であり、また、申立人●●は一私人に過ぎず、報道される事項の公共性、公益性は高いとはいえません。

そして、申立人●●は、逮捕以降捜査機関の取り調べに対して一貫して黙秘しており、また、街中における偶発的な身体的な接触を伴う言い争いが被疑事実で

あるため客観的な物証が存在する可能性も低く、不起訴もしくは無罪となる可能性が十分にある事件といえます。

このように、本件被疑事実は、報道される事項の公共性、公益性は高いとはいえ、実名報道の必要性は低いといわざるをえません。これに対して、本件被疑事実につき、申立人●●が不起訴もしくは無罪となる可能性は十分にある事案といえますので、申立人●●の私生活上の事実をみだりに公開されない自由(いわゆるプライバシー権)を重視し、少なくとも起訴に至るまでは、実名報道を控えるべき事案であったと思慮いたします。

貴社におかれましては、今後、逮捕段階で実名報道をされる際には、事件の内容や被疑者の社会的属性等を慎重に考慮していただき、できる限り実名での報道を差し控えるよう、要望いたします。

(別紙)

## 要望の理由

### 1 申立の概要（プライバシー権に関して）

相手方●●●●●●●●(以下、「相手方●●●●●●」という)は、申立人●●が未だ逮捕された被疑者段階にすぎないにもかかわらず、同月29日付で、本件逮捕について実名で報道した。

かかる実名報道は、申立人●●の私生活上の事実をみだりに公開されない自由(いわゆるプライバシー権、以下「プライバシー権」という)を侵害するものである。

### 2 認定事実

申立人●●からの事情聴取・受領資料、相手方●●●●●●、相手方福岡県警察本部及び申立人●●の弁護士●●●●に対する照会の回答結果から、以下の事実を認定した。

#### (1) 申立人●●の活動

申立人●●は、日雇い労働者を組員とする、●●・●●日雇い労働組合の組合活動に従事する者である。

平成25年11月22日午後6時ころ、申立人●●は、福岡市中央区渡辺通二丁目1番82号所在の株式会社電気ビル本館前東側歩道上において、九州電力株式会社本社に対する抗議等を目的とする「来んしゃい金曜！脱原発」行動に参加した。申立人●●は、以前から何度も同集会に参加していた。

同集会において、申立人●●は、●●●●●●から声をかけられ、同氏と一緒にいたところ、午後6時40分過ぎ、同所に現れた本件の被害者とされる●●●●●●との間で口論になった。午後7時ころ、同集会は終了した。

同集会は、同日以降も、毎週金曜日、同所において開催されていたところ、申立人●●は引き続き同集会に参加していた。しかし、その後は、同集会に上記●●が現れることはなく、また、警察官が事情聴取等に訪れることもなかった。

#### (2) 逮捕・勾留について

平成26年1月28日午前7時ころ、福岡県警察本部の警察官ら10名程度が申立人●●の自宅を訪れ、搜索差押令状を提示し、申立人●●宅を搜索した。また、申立人●●に対し、逮捕状を示し、手錠をかけて逮捕した。

同月30日、申立人●●は勾留されたが、同年2月8日に釈放され、同月10日に起訴猶予処分が決定した。

### (3) 相手方●●●●●の報道内容

ア 相手方●●●●●は、2014（平成26）年1月29日付福岡都市圏版で、本件逮捕の事実を実名報道(以下、「本件報道」という)した。その際、申立人●●が黙秘している事実、申立人●●が●●●●●に所属している旨を記載している。ウェブサイトへの掲載はなされていない。

イ その後、相手方●●●●●は、同年2月20日付福岡都市圏版で、処分保留で起訴猶予となった事実及び申立人●●が福岡県弁護士会に対し人権救済を申立てた事実を実名で報道した。

## 3 判断（プライバシー権侵害）

### (1) 問題の所在

相手方●●●●●は、申立人●●が暴力行為等処罰に関する法律違反で逮捕された事実を、実名で報道している。かかる報道が、申立人●●のプライバシー権を不当に侵害していないかが問題となる。

#### ア プライバシー権侵害の有無及び判断手法

およそ人には、他人に知られたくない私生活上の事実又は情報をみだりに公表されない利益としてのプライバシー権があり、これは人格的自律に不可欠な利益であるから幸福追求権（憲法13条後段）に基づき憲法上の保障を受ける。逮捕されたという事実は人の社会的評価に直接かかわる私生活上の情報であるから、これを実名をもってみだりに公表されないことはプライバシー権として憲法上保障されるどころ、本件報道は申立人●●の承諾なく申立人●●の実名を報道しているから、申立人●●のプライバシー権を制約しているといえる。

そして、本件報道が申立人のプライバシー権を侵害しているとして、プ

プライバシー権の不当な侵害であり人権侵害であるとまでいえるか否かは、実名を公表されない法的利益とこれを公表する理由とを比較衡量し、前者が後者に優越するか否かによって判断すべきと解される（最判平成6年2月8日参照）。特に、逮捕時という捜査の端緒の段階の報道では、報道機関独自の取材によらず警察発表に依存した報道がなされ、あたかも被疑者が罪を犯したかのような報道がなされる場合があり「有罪判決までは無罪が推定される」という原則にもとる可能性があるといえ、また、後日、捜査・裁判の過程で無実であることが判明した場合などには、被疑者・被告人の被った被害は取り返しのつかないものとなることから、慎重な比較衡量を行う必要がある。

具体的には、実名報道の必要性として、犯罪の軽重や態様及び被疑者の社会的属性から報道事項の公共性及び公益性の高低を考慮し、被疑者のプライバシー権の保護の観点から、別件逮捕の可能性がある事件、黙秘事件、否認事件、物証が乏しく冤罪の疑いがある事件等不起訴もしくは無罪となる可能性があり実名報道を控えるべき事件かどうかを総合的に考慮し、実名報道がプライバシー侵害に当たるか否かを判断すべきである。

## イ あてはめ

本件被疑事実は、暴力行為等処罰に関する法律第1条違反であり、法定刑が3年以下の懲役又は30万円以下の罰金という比較的軽微な事件である。加えて、行為態様についても、勾留状記載の被疑事实在真実であったとしても、暴行の内容は●●●●のコートの襟首をつかみシャッターに押し付けるといふ程度のものであって、暴行の態様はそれほど悪質とは言えない。また、申立人が関与していた反原発活動は、多くとも20人程度の人々が集まる程度の小規模な集会にすぎず、また市民が三々五々集まるような態様で行われており、組織立って運営されているようなものではなく、その社会的な影響力は小さいと言わざるを得ない。さらに、本件被疑事实在行われた当日および翌日において、本件事件をマスコミが報道した事実はなく、各マスコミが被疑事实在報道したのは事件から2カ月も経った後

である。かかる事実からすれば、本件被疑事実は、社会的な関心が大きい事件とは到底いえない。また、申立人●●は、●●●のメンバーかは確認ができず、また仮に申立人●●が●●●のメンバーであったとしても、一私人に過ぎず、被疑者の社会的属性を加味してみたとしても、報道される事項の公共性、公益性は高いとはいえない。

これに対して、申立人●●は、逮捕以降捜査機関の取り調べに対して黙秘しており、被疑事実を認めてはおらず、逮捕時点において被疑事実が真実であるかについて疑いが残る事件であるといえる。また、街中における身体的な接触を伴う言い争いが被疑事実であり、被害者に傷害結果が生じているわけでもなく、客観的な物証が存在する可能性も低い。とすれば、本件は、被疑者が被疑事実を認めてはおらず、また客観的な物証が存在する可能性が低い事案であるから、不起訴もしくは無罪となる可能性が十分にある事件といえる。

以上、本件被疑事実は、報道される事項の公共性、公益性は高いとはいえず、実名報道の必要性は低いといわざるをえない。これに対して、本件被疑事実は、不起訴もしくは無罪となる可能性が十分にある事案であるから、被疑者●●のプライバシー権を重視し、少なくとも起訴に至るまでは、実名報道を控えるべき事案といえる。したがって、本件被疑事実に対する逮捕段階での実名報道は、申立人●●のプライバシー権を著しく侵害するものといえる。

## ウ 結論

以上のとおり、相手方●●●●●の報道は、申立人●●のプライバシー権を侵害するものであり、人権侵害に該当する。

本件において、報道の対象となった事件は、逮捕の約2ヶ月前に発生した比較的軽微な事件であり、事件発生当時、当該事件が報道されたことはなく、逮捕までの期間においても社会的な関心を集めた状況もなかった。そして、被疑者は黙秘しており、客観的な物証が存在する可能性は低く、冤罪の疑いがあった。

これらの事情からすれば、相手方●●●●●が、本件について実名報道を行うにあたっては、漫然と警察発表に依拠するのではなく、事件現場となった集会の状況や事件後も毎週開催されていた集会の状況などを踏まえ、実名報道等の必要性について慎重に検討することが求められていたというべきである。

以上の本件に関する事情からすれば、相手方●●●●●に報道の自由が保障されていることを踏まえても、安易な実名報道によるプライバシー権侵害が繰り返されることのないよう、相手方●●●●●に対しては要望するのが相当である。

以 上